

皆様お元気でしょうか？

今日私たちは、全世界の教会とともに聖母被昇天の祭日のミサを捧げます。

このミサの中で二つの意向のために祈ります。

一つ目は、471年前の今日、聖フランシスコ・ザビエルが日本に初めて、キリストの福音をもたらしたことを記念し、感謝すること。

二つ目は、日本のカトリック教会が、38年前から実施している、平和旬間の締めくくりの日として、世界の平和の実現のために祈ることです。

特に今年は、戦後75周年を迎えます。先の戦争で失われた命は、日本人だけで、230万人以上とされています。

これらの方々の尊い犠牲の上に、今日の私たちの生活が成り立っていることを想起し、哀悼の意と、永遠の安息をお祈りいたします。

さて、今日は、聖母被昇天の典礼を用いますが、その意味についてお話いたします。まず、聖フランシスコ・ザビエルは、その書簡の中で、2回、自分が鹿児島に着いたのは、聖母の祝日であったと記し、そのことをとても喜んでいました。ところで、邦訳では、その日を8月15日としています。海難事故が多発していた当時、船員たちは、航海の無事を Stella Maris つまりマリア様のことを「海の星の聖マリア」とよんで、真剣に祈っていました。

次に、聖母被昇天と戦争と平和についてですが、聖母マリアが、死後、霊肉とともに天にあげられたという伝承は、少なくとも700年ぐらい前から人々の間でありました。中世期に建てられた、イタリアの教会には、被昇天の絵をフレスコ画で見ることができます。

1950年11月1日、ピオ12世教皇は、聖母被昇天をカトリック教会の信ずべき教義として、全世界に発布しました。第二次世界大戦が終結してから5年後です。

人類が世界を巻き込んだ世界大戦を2度と繰り返さないために、聖母の取次ぎを心から祈念したのです。以下にその全文を朗読します。

## 乙女聖マリアの被昇天の教義宣言文

3900：聖なる教父たちと神学者たちのすべての論証と考察の根本的な基礎は聖書である。聖書は、子と密接に結合され、常に子の使命に参加している神の母を我々に示している。そのため、キリストを宿し、産み、自分の乳で育て、腕に抱きかかえたマリアの霊魂だけでなく、地上の生活を終わった後にその体が、主から離れて過ごすということは考えられないことである。マリアの子であり、神の掟を完全に果たしたわれらのあがない主が、永遠の父だけでなく、最愛の母をも尊敬したのは当然である。その上、キリストはマリアの体を腐敗から守る力を持っていたのであるから、実際にそうしたと信じなければならない。

3901：すでに2世紀から教父たちは、マリアを新しいエヴァと呼んでいることを忘れてはならない。彼女は新しいアダム（キリスト）に従属していたが、創世記3章15節にあるように地獄の敵との激戦において、キリストに密接に結びついていた。そして、異邦人の使徒（聖パウロ）の書簡において、いつも結び付けられている罪と死（ローマ5, 6；1コリ15, 21～26；15, 54～57）に完全に打ち勝ったのである。従って、キリストの栄光に輝く復活が、決定的勝利の本質的な部分、最終的なしるしであったのと同じように、罪に対するキリストとマリアの共同の戦いもまた、処女マリアの肉体の「栄光」によって終わりを飾ったのである。「この死ぬ者が不滅をまとうであろう時、死は勝利に呑まれた」という聖書の言葉が実現すると聖パウロは言っている。（1コリント15, 54）

3902：「唯一で同一の予定の計画」によって永遠の昔からイエス・キリストと密接に結ばれていた神の母マリアは、原罪なくして母の胎に宿り、神の母としても完全に処女であり、神である購い主の寛大な協力者であった。罪とその罰（死）に完全な勝利をおさめた救い主は、最後にこれらの特典の最高の飾りとして、自分の母親の肉体の腐敗を免除したのであった。こうして、そのひとり子と同じように死に打ち勝ち、霊魂も肉体もともに天の栄光にあげられ、そこで「万世の不朽の王」（1テモテ1, 17）であるそのひとり子の右に、輝かしい女王としての位置を占めている。

3903：したがって、処女マリアに特別の慈愛を注いだ、全能の神の栄光のため、万世の不朽の王であり罪と死の勝利者である子の栄誉のため、聖母マリアの栄光を増すため、そして、全教会の喜びのために、神に向かって繰り返し祈りをささげ、真理の霊の光を呼び求めた後、われわれの主イエス・キリストの権威と、使徒聖ペトロと聖パウロの権威、および私の権威により、無原罪の神の母、終生処女であるマリアがその地上の生活を終わった後、肉身と霊魂とともに天の栄光にあげられたことは、神によって啓示された真理であると宣言し、布告し、定義する。

1950年11月1日

教皇ピオ12世